某が親の為に捨身の思立るまゝ各八涕くゝび給へと拾く言葉を
尽せ共も人止り得ぬして只三騎谷入けるが内ぞ有難き角
て三人るより下立て響の鳴るを止めを調を以て馬の舌を巻抱
音さゝして鎗の陰首を握一時打の谷合に打たけたるまゝ
孝感天心を動し久ふ夜討の敵の何心なく一人双び来
るれと三人蜀掛て突伏る積て来る敵以の外驚て周章
多少人見一を慈くり退くり其陳に三人面く敵の首を提ける
引寄くひしくと打乗るゝ解江父の敵なれば止めをちもゝ
と立向敵の死骸を引立て勝ち誇く指笑き望を付ける
時勇で陣に戻りる緒人呆て見て奇代の名栖無類の

孝行を感涙を流し又二人の傍輩命を捨て万死の
友をとるち剛高名一其名堅固に為く事古今為しかき勇士に
清正を初て涙を流し給ひり扨清正の本陣に一番貝二番貝を立
しりとく共一吉の陣に貝を立ぶるに依て清正を押来をゆく
らふ十月朔日に遂に次一吉の軍兵曽て睦を交ゝして西
陣あを守ゝまばけ八き永川の敵地に悠然として在陣しとと
いゝども敵絶に近付得ぞ一吉軍兵に向て曰此表を出るに夜中
に川を渡さば敵川の瀬に知り川に乗ひろて夜合戦に
ゝ然月なし敵味方見分難く見若くに明方の刻に出
遍くとあを諸兵畏て二日の曙に小荷駄夫丸等足弱き者共

殘らず先渡し軍兵共一吉に向て馬を渡さるべしと云れば一吉乘しうして軍士一同に越べしと云り軍兵又云るは此度の類の出陣をとゞめ此山の如くあるめと申さば川越きらに極まり早く陣幾あつく向の堤に馬を立らるべし若軍兵一ツ出越の時節大敵出て馬驗を慕ひ川水に乘入鉄炮を打掛戦を挑て欺かば出る落を建まさぐる事有べしと其時清正加勢として出張あるべきぞ人会に有べしと理とせめて申けるば一吉尤とて旗を進め乘入向の岸に立ならぶを見る軍士本陣を先とし小屋悉く自燒して川の半に乘入られば案のごとく敵一万余川岸に乘出て鉄炮を打かけ軍士川中に出て敵の方へ馬を乘

向き岡を喊と上て引返し静と味方の陣へ乘上るべ一吉清正を先として諸軍兵あらく小古今無双の退拠ぶりを誉ぞり其日水垣小陣を取此道六里此所ゆく又聖合の合戦あるも将一軍に成て戦敵少く討れ味方も少し討死は三日慶州に著陣に此道三里さるよ寺の舊跡ゆ是バ内裏の殿中大佛殿ゆ是ハ霊験殊勝の寺も荒荒廃の蓋治中の商屋治外の民屋三十余家軒有て富貴の地なり反ゆ十八階ある撞樓あり是撞木の蕚る蓮花八九尺ゆ方と九めくゆ方と南ゆ小道雷ゆ禁中殿を先として一宇も残ず放火す七日キラレ水陣を此道八日慶尚道蔚山と云海際まで帰陣を此道三里此所海道と云自由第一の地なるまバ是より越年をべしとて海を後に南て小屋

210.4
1

と丈夫ふ掛茅ふ左右三方ふ二間口のあ〜堀をゐり大柵五重ふ付口〜
出入の口々千鳥ふあけ遠〜柵一重ゑの口〜ゐる大須戸ふ丈ふ立て柵の
内ふ数々ふの櫓をあげ遠見外ぎて番を置柵の外ふ八五ゑふ七ゑ所
ふ篝火を焼明しけふ

朝鮮物語巻之上終

朝鮮物語

中卷

2104
2

朝鮮物語卷之中

大河内茂左衛門尉源朝臣秀元記

十月十日上將軍秀詮公より黒母衣の小使番太田小十郎をもつて
蔚山太田飛彈ちゞ本陣へ召され上意の趣は此度奥國中の働よ
飛驒守主計頭數人に拔出忠節の仕舉て計るべくゝそ君臣の義を
重ト其分武命を捨ざるゝ故なりあ人働に付き一澤甲十郎
兵衛尉瀧八郎左衛尉石上を以て聞ふの次第近日言上に及ぶ一此
度秀詮濟海をとゝしへども釜山浦の城主に仰付られをーに依て
國中見物をする事能ざさせぶ沙奉ゝを遂げまへはるべく濟海

53513
28.3.31 和
寄贈

徐ふ〜せそて東西の先手ふ新地の石出を石付〜其道路る
面き地形を見立年門余日あく寒天ありといへども追付出来
せふ松ふ申付べき旨仰下られる飛彈ち承り誠ふ以難有仕誕
ふくに序先手の城仰付〜る紙畏り奉る由ち清申上ケり七月舟
合戦言上せ〜日本よりの返事南原落城言上の返事小十郎
今日持参せり飛彈ち封を開拝見せ公ち感淺うして舟軍
左馬介又十郎一番秋月三郎高橋九郎毛利吉政ち二番と定下
さふく南原先乗五人の者共ふ褒美として判金二十枚ち羽
織を添〜まけ大河内茂左衛門尉一人中々判金三十枚ち後の
由羽織を成下さる各面目身ふ除ケり

死驛ち主汁張蔚山の地形を見立急の普請るれば吉日を撰ふ
及ぶ十二日縄張鍬初を淺野左京大夫中納言輝元ダ先ち完戸備
前ち安國寺ふ十塲を渡〜各二万三千餘人の人数を以ち風雨を
厭ず昼夜ち石垣飛驛ち主汁張人数を以て蔚山城廻
りふ大柵三重付〜四方櫓を上くり一吉清正ふ向て此ち居城
人少ふて如何ち其上長陣の苦勞るる軍兵を召連帰城有て
休息御〜と云りまけ汁張仕で出来るば一吉守護の為加藤ち左馬
尉同清ち右衛尉近藤四郎右衛門尉ふ鉄炮三百挺付置西生浦上浜
ア〜り秀俊仰として西の出先ち順天の城十八日より鍬初あり鶴
鳴信濃ち寺澤志摩ち松浦肥前ち合て二万三千七百人の人数を以

見和泉守鍋谷内蔵允を召奉りて五五の東の山先を蔚山の城と其間海路一百七十三里なり

飛騨守桂木を代て左京太夫幸長に合力せんとて二千除人の人夫に軍兵二十八騎を奉行として旗七本に多張炮三百差添て毎日入山を清正幸長完戸備前守安國寺恵瓊人夫も付給て薪切に入山を十一月廿四日蔚山の乾に當る大山に登りと二十八騎の士人夫を召連江川を渡り義川原に乗上る如に弓手の山の頂に人二人立て幕を揚て呼何事ぞや問へる彼軍人立て答て家人成り今朝より鶴の白を絞りひ出て存の外なる大敵出来り幸命を助りて這て此山に逃登りぬ各の旗先を見て乾の大山に引靡るあ

の山中に八敵必定居るに其儘覺悟有へしと教て二十八騎の其中に如何を せんと評定しける者多し又其中に総大敵引の為りとも桂木切らで有べきやうなく彼山に分入望に叶ふ伐出し先陣所に遣し張番の軍士を麓に下し敵に敵三千余山中より分出大山の中半に備を立て岡の高と上目の下に見て雨霰の降ぬく計掛打て麓を南に五六町東西に三百余丁計の蘆原なるが味方の小勢枯野の芦の中に五六居るが此芦原に伐乗出に二三丁が内にて討亡さるべし大敵なるべ合戦に成ば及ばず一兎やせん角やせんと寒天に汗を流し少しめく内に張番二十八騎の内福地加兵衛山清兵衛尉未士二人三人の奴共を召連て極め一生の樂を果

為に見切て棄出し散々に逃げる宅山一騎と千騎ばかりと頼まれ
きばかりに荷りけまを共跡をもつなぐ退くりなを斯りなれば不可
の谷ふかく聲聞も大河内是をゆて定て味方の人夫多くと捨殺
ふもとにきまれば引出きんと云て乗のりをと傍輩林蘭奮つ尉川
村十郎制して曰法を立て義を乱ばこれ迷ハ此如と申如
し給へ是ハ絶の小事なまぐ我等二人似合りと云捨て敵漫
と備る下の谷合へ向ひまるぐ乗入思案のごとく清ぶ先手林
隼人佐ゲ人夫ゆりしかば人馬を出し一ゲり角て二十五騎の軍
士ゆりぐを欲ぐを握る兎角葉を待て引返しと云もあり川村
林大河内近藤甚左衛尉当ゆるハ其内加勢来て引ハ死る

そのを追いきるるぬく加勢の者共後日の高言を聞ハ生る甲斐を
るるぬきとこのてを果る書ふ大河内枯る草をとふぐり
口茅をとりて火縄の火を付く落しけまバ人長を越る枯
蘆駿く燃上ると幸と下知して曰諸人駈廻て火を放てと云
まバ騎るも歩卒も諸とも に飛翔て火を付る打る南風
頻ふ吹て以の外ふ焼立炎敵ふ吹ゆけしかバ敵ゆまりゆぞて備と
少し山の上へ引る味方五十騎歩士共若干を出て軍の法迂優しく
纔ふる却きて勝鬨をあ出とあきん静ふ引ゆり山ふく
打合矢叫鉄炮の音海誠ふ蔚山聞けまバ清正の軍士山田隼
右衛尉只一騎鞭長鑑うけ合せるを幸ふ障泥を指ぞ江川

手ぶて一散に地来嶋よりも進こに矢を貫て弓を高くもあをて帰ぶ
けふ弦まる然共大河内ゞ下知せ一猛火ふく敵合の捕とゝ一
弦を通て功る虎の尾と踏で龍の髭を撫るこんも角やとぞ
賞め一〻兎角加勢を云付らるゝ引元功りけまバ早こゝ
出し事の拙子と聞く枯野ふ火をとゞ敵の捕ふ成と云事
日本ふ方て其方便をとゞ誰ゝ此武略をとゝるやといつゝ名軍
士同音ふ今日最後の働ハ大河内林り村近藤ふ成と申し林
川村近藤各の工夫ふ知くハゝるとも置て其とも存ぶゝる事
ふいつゞ正林ゞ人数ゝ大河内ゝ使を致い芦原放火も偏ふ大
河内ゞ下知ふ成て従てんと申りれバ一吉大ふ感ゞ言葉仕

今と云ゝ後面ゝ働有扶ふの口上勝く云んも愚ゝり今の仕合ふ
人夫一人も失ぶを加勢の力と浮ゞ手柄の陰今ふ限ゝ成事ふ
ゝ満足ふ過ぎのゝ成ゝて褒美として金銀ハ木を焼ゝ
翌明日ゝり山入ゝ成ゝ薪ハ面ゝ馬舟を浸の為ふきし芦と刈
取ゝき青竹ふ成ゝ先拙逃帰ゝる福地山寄来一人三人の者共
戸外ゝ出て切腹の使と為ゝ成ゝ言とも何の名ゝ成ゝ其侭ふ
出ゝ成ゝり一人の名ゝ書付ゝ然ゝふ関山流の勤首座と云出家書物の
望ゝ有て大河内と頼渡海ゝ一吉の右筆通ゝ付ゝ成事多ゝり
ゝゝバ大河内一吉一角と申ゝ一吉大ふ怒ゝ本陣ゝ呼ゝ出置ゝ成
通ゝ明ゝり此勅書産一吉の仕業武道の差引ゝと見て天晴ふ

名の大名不学の大智者文武両道の名将哉とく八十ケ國の守護と成て志うそうさきんろうりと誉くり近習の士共夫八ぬ何と問首尾善て此度も手柄の士ふ則賞を與らる事夫唐書ふ賢と称もるふ賤と不惜功と賞もるふ時と不起と書くり一古度の巳ふ此新ふ遠ひて第一英雄者第二無欲なり第三道者第四君臣の法義明なり第五武道の達者なとハ諸道公政の貴將なりと称感下ける蔚山の新城充滿ち急て来明ろ極晩ふ至て普請場とけるとて和有られハ十月の末つく〳〵凍出来ち本丸石垣の高サ八間塀の間数三百八十間二階門二ツ矢蔵六ツ二十五間の長屋あり二丸石垣の高サ五間塀の間数百三十五間矢蔵二ツ門二ツ三の丸石垣の高サ三間半塀の間数二百三十間櫓一ツ門一ツ二十八間の長屋有物見り塀合て七百四拾五間拵五間り の石垣の外ふ付る柵の間数九百六十三間あり拵構南ハ海なるとハ塀あ一柵も付ひ三方の塀の間数二千三百間門二ツ拵構塀より外土居面ふ付くふ柵の間数二千五百二十間拵構の堀面三間半深サ二間ろ中堀の外に付る柵の間数二千九百七十三間あり近辺一三里の内ふ付る故ふ拵ひ千〳〵の塀下地ハ七八寸廻りの丸木ちんく竪横ろ切て大釘ちと打て裏面より打抜裏ち返し〳〵ふり雑堪大寒國成土俵て大工ち伝の者共寒ふあてらしとち足の爪悉曝抜るゆ〳〵ふ城内家の作事ハ延〳〵りき諸方門の扉ち作く十二月三日より書清のく